

國學院大學學術情報リポジトリ

出張報告「研究課題「現代における「拾骨」の重視と全国的な普及過程に関する研究」による調査」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001546

出張報告「研究課題「現代における「拾骨」の重視と全国的な普及過程に関する研究」による調査」

科研「現代における「拾骨」の重視と全国的な普及過程に関する研究」(研究活動スタート支援 研究代表者：川嶋麗華)の一環として、民俗調査を行ったので報告する。

研究の概要は次のとおりである：

本研究は、高度経済成長期以後、家族による拾骨が全国的に普及した経緯を追跡し、現代の葬送に拾骨を位置づけることを目的とする。現在の火葬は、近代以降に開発・改良された火葬炉による遺体処理法の一つだが、そこには拾骨という儀礼的な要素が含まれる。各地が火葬場を受容する前後においてみられた埋葬・火葬といった葬送習俗を連続的に捉えることで、現在の火葬場にみられる技術と儀礼の伝承動態を検討する。

2022年9月8日～11日に岐阜県揖斐郡揖斐川町、同年10月20日～23日に山形県鶴岡市および飽海郡遊佐町、2023年2月18日～23日に東京都小笠原村、同年3月9日～12日に愛知県旧祖父江町（現稲沢市）にて、火葬習俗を中心とする民俗調査を行った。いずれも聞き書き調査から公営火葬場の受容経緯を追跡できる、高度経済成長後期以降に公営火葬場が導入された地域である。なお、愛知県旧祖父江町では、日本文化研究所のPD研究員で、葬送習俗に関する研究者である宮澤安紀氏、大場あや氏、両名の協力のもと、調査を遂行した。

上記の調査から、各地域の公営火葬場で拾骨が受容・儀礼化された経緯を追跡することができた。

例えば、小笠原諸島では社会福祉協議会が、葬儀の運営や火葬場での遺族への対応といった助葬事業を実施している。昭和40年代に日



旧祖父江町内に残された古い火葬場

本に返還された後、小笠原の社会・生活の基盤を整える中で葬儀のあり方もまた模索されてきた。社会福祉協議会が葬儀の主軸を担うようになるにつれ、葬儀の流れも一定のものへと形作られていき、火葬後の拾骨については、職員が内地で学んだ作法を取り入れたという事例が確認された。また山形県の鶴岡市域では、従来一部の土葬にみられた「五穀撒き」という作法が拾骨時にも行われており、公営火葬場の利用に伴って儀礼的要素を局所的にとり入れた事例が確認された。

現在の公営火葬場は、地方自治体や衛生管理組合などの施設保有者、または指定管理者制度によって運営・管理が行われることが多い。しかし、公営火葬場の受容経緯を追跡すると、地区で火葬場を設置する場合などもみられる。村や地区などが設置した火葬場の中には、利用者が自身らで火葬し、片付けまで行うような、賃借型の公共施設もあった。こうした施設では、火葬場の管理者が受容した例とは異なる経緯によって儀礼的要素の受容がなされており、類似した事例の更なる追跡が望まれる。

(川嶋麗華)